

# 韓偓『香奩集』の版本について

陳 文 佳

## 1. 『香奩集』についての版本著録

施蛰存氏はかつて韓偓集について、「未嘗見善本」と言い切って、また、韓偓集の各版本を見比べた上で、「均有異同、竟不能定其孰為今古、誠憾事也」と慨嘆した。<sup>1</sup> 實は、今までに韓偓集の版本についての先行論文は極少なくて、その中、専門的に韓偓『香奩集』の版本状況を論じる文章はまずはない。『香奩集』についての一番最初の著録は『新唐書藝文志』第五十：「韓偓詩一卷、又香奩集一卷。」また、晁公武『郡齋讀書志』の卷四にも韓偓詩二卷、香奩集一卷と著録される。鄭樵『通志藝文略』も亦た「韓偓詩一卷、又香奩集一卷」という。陳振孫『直齋書錄解題』卷十九「詩集類上」にも「香奩集二卷、入内廷後詩一卷、別集三卷。唐翰林學士韓偓致光撰」と記載される。以上はすべて兩宋時代の書目著録である。『新唐書』は宋仁宗嘉祐五年（1060）に完成されたので、遅くとも北宋中期までに『香奩集』の刊本が世に出ているのは疑いない。しかも殆どは一巻本と著録されるが、ただ『直齋書錄解題』は二巻と著録される。陳振孫は晁公武と鄭樵より時代の下がった寧宗理宗朝の人であり、その『直齋書錄解題』は嘉熙二年（1238）から編集し始め、ほぼ二十年かかって完成した蔵書目録である。陳氏の著録によれば、南宋中葉以降、二巻本『香奩集』はもう世に出ていることが分かる。ただ陳氏の著録は『新唐書藝文志』等がいう「韓偓詩」ではなく、「入内廷後詩一卷、別集三卷」である。『韓偓詩』は『香奩集』以外の韓偓詩を集めた作品集であり、『香奩集』との区別を示すための言い方である。宋以後は普通、『翰林集』と名づける。『入内廷後詩』と『別集』は「韓偓詩」を創作時期などで分けた詩集であって、陳氏のこの著録は一番最初のものである。一方、『香奩集』も一巻から二巻になる。これは南宋の人が『韓偓詩』・『香奩集』を新たに編集配列した可能性が高い。『香奩集』についての宋人の著録は複数残るが、實物はいずれも現存しない。それどころか、今まで宋版または影寫宋本『香奩集』についての記録もめったにない。

清人瞿鏞『鐵琴銅劍樓藏書目録』卷十九に「翰林集一卷、香奩集一卷」という條目あり、

1 施蛰存「讀韓偓詞記」、《中華文史論叢》、1979年第2期、273頁。

下に「舊鈔本」という細字の注もある。さらにこの本の詳しい版本状況も記録されている。

題翰林承旨行戸部侍郎知制誥萬年韓偓致堯撰。『香奩集』後有「無題」詩四首、「浣溪紗」詞二首、「黃蜀葵賦」、「紅芭蕉賦」二首。此從宋刻本影寫、不名「內翰別集」、亦不注「入內廷後詩」五字。<sup>2</sup>

これは『香奩集』について、今まで唯一の影寫宋本の著録である。瞿氏によると、これは宋刻本から書き寫した本である。實は瞿氏の『目錄』に影寫傳錄の例が多い。藍文欽著『鐵琴銅劍樓藏書研究』によると、影寫傳錄は瞿氏が本を求める主要な方法の一つである。そして瞿氏の抄本は、鐵琴銅劍樓の専用傳抄用紙を使う。<sup>3</sup>でも、上述の「翰林集一卷、香奩集一卷」は「舊鈔本」というのなら、瞿氏鐵琴銅劍樓が書き寫したものではないと推測される。瞿氏は版本鑑別の大家として、その『目錄』は彼が生きていたころにはもう編集済み、その後、子孫二世代が校訂補修の事に努めていて、光緒二十四年（1898）に正式に刊行される。従来、詳細で精確な記録で世に知られている。瞿氏は普通、版本を著録する時、本の舊藏状況や入手の由来、抄本なら底本の出版年・出版元などを記録する。でもこの本は「從宋刻本影寫」だけで説明し、底本の宋刻本の版本状況、またいつだれが影寫したのかが、残念ながら記録に残っていない。勿論、瞿氏の版本鑑別は絶対に間違いないとは限らない。<sup>4</sup>だが、この影寫宋本『香奩集』についての記録の正確さは、ほかの証據が出ていない限り、否定はできない。

民國十一年、瞿啓甲編『鐵琴銅劍樓書影』が刊行される。ただこの本は實際、宋金元刻の版本しか収めないで、上述の舊鈔本「翰林集一卷、香奩集一卷」の書影を載らない。鐵琴銅劍樓の藏書の殆どは、1949年以後、瞿氏の子孫が續々と北京圖書館（現在の國家圖書館）、上海圖書館、常熟圖書館等に寄贈した。この本は『中國古籍善本書目』に著録がないし、また、上述の圖書館の古籍善本書目を検索しても所蔵が確認されないため、もう現存しないと思われる。しかし、中國國家圖書館には陳揆校清抄本『香奩集』（一卷）が収蔵されている。この本は「幽窗」から始まり「黃蜀葵賦」・「紅芭蕉賦」までで終わり、詩題と順序はおおよそ毛晉汲古閣刻本「香奩集」と同じである。ただ、陳揆校清抄本の書名は鐵琴銅劍樓藏抄本と同様に、異例の「匳」の字を使い、それに鐵琴銅劍樓藏抄本も「黃蜀葵賦」・「紅芭蕉賦」までで終わる。陳揆は瞿鏞と同じ常熟出身の藏書家として、二人

2 清瞿鏞編『鐵琴銅劍樓藏書目錄』卷十九、廣文書局影印光緒刊本、1967年8月、第四冊、1152頁。

3 藍文欽著『鐵琴銅劍樓藏書研究』、第四章第一節「圖書的徵訪」、漢美圖書出版公司、1991年7月。

4 藍氏の著書によると、『目錄』は数箇所だけ版本鑑別の誤りが出る。これは通常、本の序文を失ったからの判断ミスだと分析する。詳しくは第五章第六節「瞿目的特點與缺點」を参照。

はほぼ同時代人である。ただ、鐵琴銅劍樓藏抄本が見つからない限り、この二つの抄本の間にどんな関係があるかは分からない。

また、鄧小軍氏「韓偓集版本」という論文は「南州草堂徐氏藏宋刻本香奩集一卷」という版本に言及する。<sup>5</sup> 鄧氏によると、この本の版本状況は國家圖書館所藏毛晉汲古閣本『香奩集』の末尾にある傅增湘氏の手書の跋文に紹介される。そして、鄧氏の論文の文脈から見ると、彼は南州草堂藏本を直接見たことはなく、毛刻本の傅增湘の跋文を見てその旨を伝えただけだということが分かる。ただ、鄧氏は「この本は今北京大學圖書館に所蔵する」と記している。然しながら、『北京大學圖書館藏古籍善本書目』や『中國古籍善本書目』を調べても、南州草堂藏宋版『香奩集』の著録は見つからない。また「北京大學數字圖書館古文獻資源庫」で検索すると、相關する記録もない。この本は今現存するかどうかは疑問であるので、ここでは論じない。

## 2. 現存する『香奩集』の版本状況

現存する『香奩集』の版本は、閻簡弼氏の「香奩集跟韓偓」という論文に<sup>6</sup>、六種を列举する：すなわち『玉山樵人集』附本、『唐音統籤』本、『全五代詩』本、『五唐人詩集』本、『唐詩百名家全集』本と吳汝綸評注『韓翰林集』本である。閻氏が言及したこの六種の版本以外に、まだ幾種かの重要な版本が残る。それは『全唐詩』本『香奩集』一卷、清人王遐春麟後山房本『香奩集』三卷と館柳湾・卷大任同校、江戸萬笈堂刊行の『韓内翰香奩集』三卷である。ここで上述の各版本の状況を少し詳しく紹介したい。

1. 『玉山樵人集』附『香奩集』。『四部叢刊書録』の記載によると、この本は上海涵芬樓所藏の舊抄本を覆刻したものである。卷頭に「上海涵芬樓影印舊鈔本。原書葉心高營造尺五寸九分、寬三寸八分」という牌記がある。<sup>7</sup> この本は卷を分けず、詩體によって排列している。順次は四言古、五言古、七言古、長短句、五言律、七言律、六言律、五言排律、七言排律、五言絶句、七言絶句である。冒頭は四言古詩の「春晝」から始まり、七言絶句の「辰子」で終わる。各體の詩は總計100首である。

2. 胡震亨『唐音統籤』本。『唐音統籤』は明末の胡震亨が編集した唐五代詩の總集で、韓偓『香奩集』は戊籤七十五に収められ、上下兩卷に分けられる。この本は『玉山樵人集』

5 鄧小軍「韓偓集版本」、鄧小軍著『詩史釋證』、中華書局、2004年。

6 閻簡弼「『香奩集』跟韓偓」、《燕京學報》、1950年、第38期。

7 『四部叢刊·集部·玉山樵人集』、名古屋大學所藏上海商務印書館影印本、1926年。

附本と同様に、詩體によって排列されている。順次は四言古詩、五言古詩、七言古詩、長短句、五言律詩、七言律詩、五言排律、七言排律、六言排律、五言絶句、七言絶句である。上巻の排列順は『玉山樵人集』附本の前半とを照らし合わせると全く同じで、下巻は附本の後半部と比べて11首の次序が異なっている。最後に「詠鑑」の一首だけが多い。各體の詩の總計は101首となる。この本は異例の二巻の形態だが、戊籤『韓偓詩』の巻首に胡震亨の按語があり、この本の由来を述べる。

按：偓『集』、『唐藝文志』一卷、『香奩集』一卷。『宋志』又有『入翰林集』一卷、『別集』三卷。……茲彙『翰林集』、『別集』、編年為四卷<sup>8</sup>。『香奩集』合『別集』中一二艷詞為二卷、附末。而畧譜其年於左、俾讀者晰其出處之槩云。<sup>9</sup>

これによると、該書は胡氏自身が再編集し、新たに巻を分けたことが分かる。ちなみに、『唐音戊籤』は晩唐詩人凡そ百十人の詩を収め、各人の詩、例えば杜牧、李商隱、温庭筠、皮日休、陸龜蒙、司空圖の詩は全て、詩體によって排列されている。すなわち『翰林集』、『別集』、『香奩集』を分體本に改編したのは、胡氏が『唐音統籤』全體の體裁を統一するための仕事であった。

3. 『全五代詩』本。『全五代詩』は清の李調元が編集した五代十國の詩歌總集で、乾隆年間に初版が刊行された。卷七十九に『香奩集』が収められる。この本の詩題・排列順は『唐音統籤』本と全く一致するが、巻を分けておらず、詩體も表記していない。各體の詩の總計は101首。恐らくこの本の底本は『唐音統籤』本であろう。

4. 毛晉校汲古閣刻本。該書は明末汲古閣が刻印した珍本であり、書名は『香奩集』である。現在、中國國家圖書館と日本内閣文庫（紅葉山文庫舊藏）に収蔵されている。嚴紹璽著『日藏漢籍善本書録』の「集部別集類」もこの本の版本状況をこう記録する：「每半葉有界九行、行十九字。白口、左右雙邊。」<sup>10</sup> また、民國丙寅年（1926）五月、上海涵芬樓出版の影印本もあり、『五唐人詩集』に収められる。

この本は巻も詩體も分けないし、所収の詩も『玉山樵人集』附本と比べて異同がある。詩の排列順も以上の三種の版本を照らし合わせると大いに違っている。この本は厳格な編年本ではないが、だいたい年代順に詩を配列する。そして、詩だけではなく、詞の「浣溪沙」二首と賦の「黃蜀葵賦」、「紅芭蕉賦」二篇も収めている。巻末には毛晉の識語がある。詩

8 『唐音統籤』本「韓偓詩」四巻は分體本である。胡氏が所謂「茲彙『翰林集』、『別集』、編年為四卷」とは、「韓偓詩」を詩體で分けた以上、各體の内の詩をおおよそ年代順に配列するということである。

9 『唐音戊籤七十五韓偓詩』、四庫全書存目叢書補編、第八十六冊。齊魯書社、2001年9月。

10 嚴紹璽編著『日藏漢籍善本書録』、下冊、1490葉。中華書局、2007年3月。

詞・賦の合計104篇。清人震鈞の『香簃集發微』は、この汲古閣本『香簃集』に依って書いた本である。

ちなみに、汲古閣本『香簃集』の版本の特徴は前述の『鐵琴銅劍樓藏書目錄』巻十九の影宋寫本『香匳集一卷』の著録と吻合する。巻末に「無題」詩四首、「浣溪紗」詞二首、「黃蜀葵賦」、「紅芭蕉賦」二首と配列するのは、清以前の刊本なら毛氏汲古閣本以外はない<sup>11</sup>。この本は宋版『香奩集』の姿を保存した可能性があると考えられる。

5.『唐詩百名家全集』本。『唐詩百名家全集』は清の席啓寓が編集した中晩唐詩集であり、別名を「唐人百家詩」ともいう。初版は康熙中に刊行され、巻首には葉燮の「百家唐詩序」、宋肇の序と席氏の自序がある。葉燮の序は年月を記さないが、宋肇の序は「康熙戊子六月商丘宋肇撰」と、席氏の自序は「康熙壬午秋九月朔吳郡席啓寓序」と識している。康熙壬午はすなわち康熙四十一年（1702）で、戊子は康熙四十七年（1708）である。朱彝尊『曝書亭集』巻第七十五「工部主事席君墓誌銘」により、康熙帝が席啓寓の邸宅に臨幸したこと、また、席氏が帝に書籍を献上したことが分かる。

歲己卯、御舟渡太湖、親幸其圃。……暇又輯唐人詩百家、亦鏤版行之。天子幸第時曾進。<sup>12</sup>

この「唐人詩百家」はつまり『唐詩百名家全集』のことを指す。己卯は康熙三十八年、西暦1699年である。席氏『唐詩百名家全集』の自序にも、「若前鐫五十八家、恭呈御覽」と記載される。『清史稿本紀七』の記載と見合わせると、席氏が康熙帝に『唐詩百名家全集』を進呈したのは、康熙三十八年春、康熙帝が第三次南巡時のことと分かる。しかし、進呈当時の『唐詩百名家全集』は前の「五十八家」だけで、まだ未完成の状態だった。全集の編纂は遅くとも康熙四十一年まで完成したが、刊行は恐らく康熙四十七年以降のことであろう。<sup>13</sup>以後、光緒八年（1882）席氏の後人が刊行した補修本、また民國九年（1920）上海掃葉山房の石印本もある<sup>14</sup>。『全集』の序文を書いた葉燮と宋肇は二人とも清初の名大な詩人・詩論家である。宋肇もまた康熙朝の高官で、康熙帝が席家に臨幸した時、江蘇巡撫としてその場に居合わせた。しかも「恭呈御覽」ことで、席氏が編集したこの唐人詩集は、当時、一定の權威と影響力を持ったことが予想される。『全集』本『韓内翰香奩集』は異例

11 詳しくは附表を参照。

12 朱彝尊撰『曝書亭集』巻第七十五、王雲五主編『四部叢刊正編』第81冊、台灣商務印書館、1979年11月、第566葉。また王利民的校點本『曝書亭全集』（吉林文史出版社、2009年）もある。

13 「工部主事席君墓誌銘」の記載によると、席啓寓は康熙三十九年（1700）から四十二年（1703）までの三年間に、母のために喪に服していた。そして席氏自身が「服除、甫七月而君卒」と。もしかして以上のことが原因で全集の刊行が遅れたのだろう。

14 日本では、光緒八年刊本と民國九年上海掃葉山房の石印本は複数収蔵されているが、康熙中の初版は京大人文研に一部だけ所蔵する。

の三巻の形で、四十首目まで<sup>15</sup>（「幽窗」から「鬆髻」）の編目順は毛晉汲古閣本とほぼ同じであるが、それ以後の順序は乱れた處が幾つかある。この本も詞賦を収めているが、「紅芭蕉賦」の後は「南浦」、「深院」、「閨情」、「想得」、「自負」、「天涼」、「日高」、「夕陽」、「舊館」、「中春憶贈」、「半睡」、「春恨」など十二首が排列され、詩・詞・賦の合計は114篇である。巻一は「幽窗」から「寄遠」まで、計41首。巻二は「蹤跡」から「曲子浣溪沙二首」まで、計59首。巻三は「黃蜀葵賦」から「春恨」まで、計14篇。すべて創作年代順によって排列される。つまりこの本は編年本である。

しかしながら、民國九年上海掃葉山房の石印本だけは巻を分けない。これは恐らく、当時の編集者が勝手に巻数を改編したからであろう。閻簡弼氏の論文の注釋により、彼が掃葉山房の石印本を用いてこの本を紹介したということが分かる。故にこの本を三巻本に分類しないのである。

6.『全唐詩』本『香奩集』一卷。『全唐詩』巻六百八十から六百八十三までは韓偓詩である。『全唐詩』韓偓の略傳に「『翰林集』一卷、『香奩集』三卷、今合編四卷」というが、實際のところ、正文は巻六百八十から六百八十二までが『翰林集』（しかし『翰林集』という題名は記さず）で、巻六百八十三が『香奩集』である。施蟄存氏は「疑うらくは小傳誤り有り、當に『翰林集』三卷、『香奩集』一卷と云うべきなり」と主張する（『讀韓偓詞劄記』）。この解説は一見つじつまが合うが、しかしながら、現存する『翰林集』（或いは「韓内翰別集」、「玉山樵人集」ともいう）は主に一卷本の形で、『全唐詩』より少し時代が下がった乾隆朝編修の『四庫全書』にも、『韓内翰別集』一卷を収める。これも『全唐詩』と同じく官修の書籍であり、当時の政府側の學者たちの觀點を代表する。『唐音統籤』本『韓偓詩』は四巻だが、先に引用した胡震亨の按語によると、胡氏自身が再編集したものである。また、嘉慶十五年、王遐春麟後山房<sup>16</sup>刻本『翰林集』も四巻である。が、該書は上述『唐音統籤』本と違って分體本でもないし、分巻状況も全く異なっている。王遐春は底本のことを一切言及していないため、彼自身が排列、また巻を分けたのかどうかは判断できない。清末吳汝論評注の『翰林集』は三巻本であるが、吳本の詩題配列順分巻状況、しかも詩題の下韓偓元注<sup>17</sup>も『全唐詩』本そのままである。吳氏自身は底本のことを言及していないが、恐らくまさに『全唐詩』本に基づいて評注したと推測される。實は吳氏『香奩集』にも類

15 閻簡弼氏の論文に「42首之前」とするが、誤り。

16 麟後山房は王遐春の室名である。王氏が刊行した全ての本は版心の下方に「麟後山房」という文字を印刷される。

17 韓偓の元注は、編年本にしか載らないが、分體本には付けていない。この状況は『香奩集』も同じである。

似する状況があるのだが、また、後に論及する。

一方、『全唐詩』の編集は康熙四十五年（1706）に完成され、『唐詩百名家全集』の編集はその前の康熙四十一年（1702）に完成されていた。つまり、当時は『全集』本の底本も含めて三巻本『香奩集』はすでに世に伝わっていたのである。『全唐詩』本『香奩集』は「幽窗」から始め、詩題と配列順はほとんど『唐詩百名家全集』本と同じである。言い換えれば、巻を分けないこと以外に、『全唐詩』本はすべて清人刻の三巻本『香奩集』の構成とよく似ている。ただ、『全唐詩』本は詞賦を収めないし、巻尾に（「春恨」以下）『鞦韆』一首、『長信宮』二首と斷句一聯を補編している。恐らく『全唐詩』本『香奩集』の底本は三巻本で、編集者はそれに基づいて添削校訂したのであろう。そして『唐詩百名家全集』と同じ底本である可能性もある。ただ、『全唐詩』の編集者は各巻の詩の量を配慮して、改めて巻を分けたのであろう。つまり、小傳の作者がわざと「今合編四卷」というのは、新たに巻数を改編したという意味を表すであろう。従って、小傳に所謂「『翰林集』一卷、『香奩集』三卷」というのは『全唐詩』の編集者が使う『翰林集』・『香奩集』の底本の巻数を指し示し、単なる書き誤りではない可能性が高いと思われる。

7. 『中晚唐五家集』本『重刊宋鄭唐韓内翰先生香奩集』三卷。『中晚唐五家集』は清嘉慶十五年（1810）福建の王退春・王學貞父子が校訂刊行した中晚唐人詩集である。韓偓は四人目の詩人として、その『翰林集』と『香奩集』を収める。『中晚唐五家集』は現在、日本内閣文庫に所蔵されているが、ただ嚴紹盪『日藏漢籍善本書録』に著録されていない。『中晚唐五家集』本『香奩集』は三巻に分けられ、巻頭に韓偓の「自序」あり、次に「香奩集目錄」、正文は「幽窓」から「春恨」で終わる。詩題と排列順は『唐詩百名家全集』本と全く同じである。正文の後に「香奩集附録」と王學貞が撰した『書後』一篇がある。王氏父子が編集した『翰林集』四巻は『續修四庫全書』集部・別集類に収められるが、『香奩集』は『續修四庫全書』に収められないため、廣く知られていない。ゆえに閻簡弼氏、徐復觀氏、施蟄存氏、鄧小軍氏等の論文に論及されなかった。

8. 清吳汝綸評注『韓翰林集』本。この本も三巻に分けられて、編目順は『唐詩百名家全集』本王氏麟後山房本とはほぼ同じであるが、巻末には（「春恨」以下）『全唐詩』本と同じく『全集』本より『鞦韆』一首、『長信宮』二首と斷句一聯だけが多い。詩詞・賦・斷句の合計118篇。この本の初版は民國十一年（1922）武強賀氏の刊本であり、巻尾に吳汝綸の息子の吳闓生が書いた「跋」がある。落款は「壬戌秋七月闓生謹記」。この壬戌は即ち民國十一年。また、民國二十五年『關中叢書』第五集としての再版もある。この本の最後

に宋聯奎・王健・吳廷錫ら三人が書いた「跋」を付加されて、「民國二十五年一月校」と明記されている。桐城縣地方誌編纂委員會編修、黃山書社1995年出版の『桐城縣誌』によると、吳汝綸は道光二十年（1840）生まれ、同治三年（1864）舉人になって仕途が始まり、光緒二十九年（1903）没。吳氏が『韓翰林集』を評注したのはおおそ清末、特に同治・光緒朝の間のことと推定できる。つまり、吳本の刊行は吳汝綸没後ずっと後のことである。

#### 9. 館柳湾・卷大任同校、江戸萬笈堂刊行の『韓内翰香奩集』三卷。

この刊本はまだ中國の學者らに論及がない。韓偓『香奩集』の詩風は、南宋の嚴羽に「香奩體」と呼ばれ、相当長い間、普通の艷體詩と見なされ、ずっと高く評價されてこなかった。しかし、清朝に入ると、『香奩集』に対して評價の氣運が過去より盛んとなり、觀點も前代とはかなりの差異を生ずるようになった<sup>15</sup>。一方、日本で『香奩集』が刊行され、影響を及ぼすのは、まさに江戸時代のことである。日本に現存する最も古い刊本は、文化年間、館柳湾・卷大任同校、江戸萬笈堂刊行の『韓内翰香奩集』である。この本も三卷の編年本で、巻首に「韓内翰香奩集序」ある。正文の題目・排列順また分巻状況は『唐詩百名家全集』本・王氏麟後山房本・吳汝綸評注本などの三卷本と全く同じである。ただ、巻末には（「春恨」以下）『全集』本と麟後山房本より「欄干」一首だけが多い。詩・詞・賦の合計115篇。この本の最後に卷大任の跋文があり、識語に曰わく「文化庚午十二月廿八日、新瀉卷大任江戸日本橋南平松坊寓居に書す」と。文化庚午はつまり文化七年、十二月廿八日は1811年1月22日である。跋文の創作時期は分かるが、本の刊行年が記されていない。朝倉治彦・大和博幸が編集した『享保以後江戸出版書目』で調べると、「文化八年未三月廿五日割印」という條下に「香奩集全卷冊」の書目が載る。

同八年未三月

香奩集全卷冊 唐韓 偓著 板元売出し 英 平吉

同二十四丁<sup>16</sup>

書名について、萬笈堂刊本の扉に『韓内翰香奩集』と書いているが、表表紙にちゃんと『香奩集』と名づける。そして萬笈堂刊本『韓内翰香奩集』の版本特徴は以上の記録と全く一致する。これで萬笈堂刊本の刊行年月は文化八年辛未（1811）三月だと分かる。その後

15 「四庫全書總目提要」曰く：「為學士時、内預秘謀、外爭國是、屢觸逆臣之鋒、死生患難、百折不渝、晚節亦管寧之流亞、實為唐末完人。」韓偓の品行節操またその生涯の事跡を踏まえて、清人が『香奩集』を論じる時、多く發微の處がある。唐孫華『讀韓致堯集』という詩は「美人香草皆離怨、莫道香奩語太憨」と詠じる。皮錫瑞『經學通論』亦云う：「即如李商隱之無題、韓偓之香奩、解者亦以為感慨身世、非言閨房。」震鈞の『香奩集發微』は、韓偓生涯の事蹟を結び付けて、その香奩詩を逐一政治抒情的な解讀をして、「有唐之『離騷』、『九歌』、復考其辭、無一非忠君愛國之愛」と誉める。

16 朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目』、臨川書店、平成五年十二月出版、421頁。



は同文化八年江戸山田屋佐助・須原屋伊八合印『韓内翰香奩集』三卷、また明治中東京和泉屋吉兵衛・須原屋伊八合印『韓内翰香奩集』三卷等の刊本が續々と出版された。これらは全て同じ館巻同校本である。

### 3. 各種『香奩集』の版本についての考察

卷氏は跋文の冒頭にこういう「右、唐韓致堯香奩集、余上年手録し、今茲に郷族の館柳灣と同校し梓に授く」と。よって、この本は卷氏の手録した物だということが分かる。しかし、彼はどの本に基づいて『韓内翰香奩集』を書き寫したのか明言をしていない。「上年」という言葉は普通、「昨年」・「前年」の意味なので、卷氏が『香奩集』を手録したのは、遅くとも文化六年（1809）のことであろう。上述の通り、『唐詩百名家全集』本『香奩集』は康熙四十一年（1702）、王氏麟後山房本『香奩集』は嘉慶十五年（1810）に刊行（月は記さず）されたので、時間から推算すれば、卷氏がこの二つの三卷本の何れかを目にし、或いは書き寫したのは可能ではある。でも、王本の序は「自序」となすが、『全集』本と館巻同校本は皆、「韓内翰香奩集序」となす。そして、王本の巻尾には「香奩集附録」がある。もし卷氏が王本に據って寫し取ったのなら、附録も寫し取るはずだが、館巻同校本には別に附録がない。つまり、館巻同校本の構成は王本より、「全集」本にもっと近似する。また、大庭脩編著『江戸時代における唐船持渡書の研究』によると、『商船載來書目』（國立國會圖書館蔵）の記載によって、天明三年癸卯（1783）に「『唐詩百名家全集』一部八套」が舶來したことが分かる。<sup>20</sup> また天明六年（1786）春正月に寫した『寅拾番船持渡書改目錄寫』（松浦史料博物館蔵）の中に、「『唐詩百名家全集』同八套四十本」の記録がある。<sup>21</sup>

しかしその一方で、江戸時代における『中晩唐五家集』の舶來記録は見つからない。これらを総合すると、卷氏は『唐詩百名家全集』本を底本として手録した可能性が極めて高いと思われる。ただ、館巻同校本の最後に載る「欄干」一首は、現存するあらゆる版本の『香奩集』いずれにも収めない。實は、この詩は『翰林集』の内の作品である。そもそも『香奩集』所収の詩は『翰林集』と幾首かが重複する。この状況は恐らく韓偓本人が『香奩集』を編集した当初、もはや存在していたと思われる。「欄干」という詩の詩風は勿論、香奩體

20 大庭脩編著『江戸時代における唐船持渡書の研究』、關西大學東西學術研究所、1967年3月、第686頁。

21 同上、第415頁。

に接近するが、疑うらくは巻館兩氏がこれを『翰林集』から選出し、『香奩集』に補足したものと筆者は推測する。

ちなみに、萬笈堂刊本の書名は『唐詩百名家全集』本と同じ『韓内翰香奩集』である。この兩本以外に『韓内翰香奩集』と命名される版本はないので、兩本の継承関係を一側面から反映しているだろう。

館巻同校本だけでなく、『唐詩百名家全集』本呉汝綸評注本も皆、底本のことを言及していない。王退春麟後山房本のとびらに「重刊宋本香薺集三卷」と記すが、具體的にどの宋本を覆刻したのかははっきり言っていない。拙文の冒頭のところに言った通り、宋代にかける『香奩集』についての版本記録は、ほぼ一卷本（陳振孫は二巻と著録す）ではあるが、三巻の刊本、また抄本は記録に残らない。もし王氏の言うことが事実であれば、宋代に編年體の三巻本『香奩集』はもうあったのかも知れない。

案ずるに錢曾『讀書敏求記』卷四「韓内翰香奩集三卷」の條下にある元人鈔本『香奩集』のことを著録する。

『香奩集』三卷、予は元人鈔本より録出。末卷に「自負」一詩多く、洪邁の絶句も亦た未だ収めず<sup>22</sup>。行間の字極めて佳にして、流俗の本に比し廻かに異なる。予嘗て名手に圖二十六幅を繪くのを命じ、裝潢して帙を成し、精妙絶倫、之を閲し意蕊舒放たり。<sup>23</sup>

錢曾是明末清初の藏書家で、その著書『讀書敏求記』は詳細かつ確實に版本の状況を著録したとして高く評價されている。錢氏が言及した元人鈔本は現在もう残存しない。しかし三巻という數は、『唐詩百名家全集』本王氏麟後山房本江戸萬笈堂本、または呉本の巻數と一致する。「自負」という詩も、上述の四本の末卷に、皆収められている<sup>24</sup>。錢氏が云う元人鈔本と王氏が云う宋本と、継承関係があるかどうかはまだ分からないが、同じ系統の三巻本である可能性は高い。假に三巻本『香奩集』は宋代から元代に傳わり、ひいては清代まで存在していて、席啓寓王退春らに見られ、校勘覆刻したとしたら、すべてに辻褄が合う。しかし、例の宋本と元人鈔本が見えない限り、これはあくまでも一種の假説に過ぎないのだ。

なお、呉汝綸も底本のことを明らかにしないが、施蟄存氏は「疑ふらくは即ち汲古閣本

22 洪邁編『萬首唐人絶句』の内、韓偓の「自負」の詩を収めない。

23 [清]錢曾『讀書敏求記』卷四、名古屋大學藏上海掃葉山房民國三年石印本、第四冊。

24 一卷本『香奩集』は『全唐詩』本以外、皆「自負」を収めない。

を用い、而して『全唐詩』に依りて之を増益改編す<sup>25</sup>と推測して、呉氏が自ら改編したものだとか考察している。施氏は呉本以外の三卷本『香奩集』を見たことないため、こういう説を出したのも不思議はない。また、閻簡弼氏は嘗て錢曾が記録した「韓内翰香奩集三卷」のことに言及し、「呉本が根據として印行したのはこの本なのかどうかは分からない<sup>26</sup>」と推測する。ただ、閻氏は『唐詩百名家全集』本『香奩集』の初版の三卷本を見たことがないし、王本のことも知らない。江戸刊本は中國に流傳したことはないが、呉汝綸は光緒二十八年（1902）五月に清政府に任命されて日本學校教育制度視察のため約四か月滞日していた。森槐南らの漢學者との交流、さらに詩歌唱和したこともある。呉氏の息子の呉闔生もちょうどこの頃日本に留學していた。呉氏父子は江戸刊本『韓内翰香奩集』を見たことがあるかどうか、まだ確證はないが、時間から言えば、呉汝綸は『全集』本王本、ひいては江戸刊本の何れかを見て、底本にした可能性はある。ただ、呉汝綸は歸國後間もなく病氣にかかり、翌年明けに亡くなった。この間に『韓翰林集』を評注した可能性は低いと思われる。

よく見比べれば、呉注本は王本江戸刊本とは少し様子が異なるところもある。まず韓偓本人の序だが、王本は「自序」となすが、呉本は「香奩集序」となす。それに王本の巻尾に載る「香奩集附録」も呉本にはない。さらに字の書き方も多少違う箇所がある。例えば、呉本は「幽窗」となすが、王本は「幽窓」となす。呉本は「嬾起」となすが、王本は「懶起」となす、等々<sup>27</sup>。江戸刊本とは同じ状況があるが<sup>28</sup>、肝心なのは呉本に「欄干」を収めない点である。各方面から見れば、呉本はむしろ『全集』本と最も近接している。無論、『全集』本とは少し字體が違う箇所もあるが、およそ呉本が『全集』本の字體と異なるところはすべて『全唐詩』本と同じ字體を使っている。そして『全集』本を含め、呉本以外の三卷本は皆、詩題の下に詩の別名を注記しないが<sup>29</sup>、呉本は『全唐詩』本と同じく細字ではっきり注記している。さらに、『全唐詩』本の最後に載る「鞦韆」、「長信宮二首」、「句」は、呉本もそのまま巻末に収め、「以下三首本集不載」という細字の注も『全唐詩』本と全く同じである。呉氏が『全集』本を底本にし、更に『全唐詩』本を参考として増補校訂し、新たに『香奩集』三卷を編集したのは、妥当な考えであろう。

25 施蛸存『讀韓偓詞劄記』、『中華文史論叢』1979年第2期、第273頁。

26 閻簡弼「『香奩集』跟韓偓」、『燕京學報』1950年、第38期、第211頁。

27 本文の後ろにつける「対照表」をご参照ください。

28 江戸刊本『香奩集』は呉本より異體字や俗字の使用が多い。例えば呉本は「幽窗」と作すが、江戸刊本は「幽窓」と作す。呉本は「早歸」と作すが、江戸刊本は「蚤歸」と作す、等々。詳しくは附表を参照。

29 實は三卷本だけではなく、分體本も皆詩の別名を注記しない。

三卷の『唐詩百名家全集』本、王氏麟後山房本、吳汝綸評注本、江戸萬笈堂刊本、また一卷の『全唐詩』本は、同じ編年本として、篇目配列順はほぼ同じであることは、かつて同じ祖本があったのではないかと考えられる。この祖本は王遐春がいう「宋本」なのか、錢曾がいう「元人鈔本」なのか、またこれ以外の本なのか、今はもはや分かりかねる。しかし、以上の五種の本は同じ系統の本である可能性はけっこう高いと思われる。汲古閣刻本『香奩集』は『鐵琴銅劍樓藏書目録』に著録する影宋寫本「香奩集一卷」との間に、もし直接的または間接的な継承関係があれば、もう一種の宋版一卷本『香奩集』の姿を保存したはずである。それに對して、『玉山樵人集』本、『唐音統籤』本<sup>30</sup>は同じ分體本でも、篇目と順序がそれぞれ異なるということは、後人が各自で改編したものであり、もう祖本の姿は残っていないであろう。

#### 参考文献

- [宋] 歐陽脩・宋祁等撰『新唐書』、中華書局、1975年2月。
- [宋] 洪邁輯『萬首唐人絶句』、文學古籍刊行社、1955年12月。
- [元] 馬端臨『文獻通考』、商務印書館、1936年3月。
- [明] 胡震亨編『唐音戊籤』、四庫全書存目叢書補編、第八十六冊。齊魯書社、2001年9月。
- [明] 毛晉校『香奩集』、日本國立公文書館所藏明汲古閣刊本。
- [清] 錢曾著『讀書敏求記』、名古屋大學藏上海掃葉山房民國三年石印本。
- [清] 唐孫華撰『東江詩鈔』、『四庫禁燬書叢刊』、北京出版社、2000年第1版、集部第187冊。
- [清] 朱彝尊撰『曝書亭集』、王雲五主編『四部叢刊正編』第81冊、台灣商務印書館、1979年11月。
- [清] 席啓寓編『唐詩百名家全集』、京大人文研所藏康熙四十七年序刊本。
- [清] 席啓寓編『唐詩百名家全集』、東洋文庫所藏光緒八年刊補修本。
- [清] 席啓寓編『唐詩百名家全集』、神戸大學所藏民國九年上海掃葉山房石印本。
- [清] 曹寅・彭定求等編『全唐詩』、名古屋大學所藏光緒十三年上海同文書局石印本。
- [清] 李調元輯『全五代詩』、嚴一萍選輯『百部叢書集成』原刻景印本、藝文印書館、1968年。
- [清] 王遐春編『中晚唐五家集』、日本國立公文書館所藏清嘉慶十五年王氏麟後山房刊本。
- [日] 野原衡重訂『韓翰林集』、關西大學所藏文化六年序刊本。

30 『全五代詩』も分體本ではあるが、前述のとおり、『唐音統籤』本を底本に使って覆刻したものである可能性が高い。

- [日] 館柳灣卷大任同校『韓内翰香奩集』、日本國立公文書館所藏文化八年江戸萬笈堂刊本。
- [清] 瞿鏞編『鐵琴銅劍樓藏書目錄』、廣文書局影印光緒刊本、1967年8月。
- [清] 震鈞撰『香奩集發微』、東洋文庫所藏清宣統三年排印本。
- [清] 吳汝綸評注『韓翰林集』、台灣學生書局、1967年5月初版。
- [清] 皮錫瑞著『經學通論』、中華書局、1982年9月。
- 『四部叢刊·集部·玉山樵人集』、名古屋大學所藏民國十五年上海商務印書館影印本。
- 『五唐人詩集』、名古屋大學所藏民國十五年上海涵芬樓影印汲古閣刊本。
- 閻簡弼「『香奩集』跟韓偓」、『燕京學報』1950年、第38期、第179~228頁。
- [日] 大庭脩編著『江戸時代における唐船持渡書の研究』、關西大學東西學術研究所、1967年3月。
- 施蟄存「讀韓偓詞劄記」、『中華文史論叢』1979年第2期、第273~281頁。
- 容應莢「吳汝綸と東遊叢錄」、平野健一郎編『近代の日本とアジア：文化の交流と摩擦』、東京大學出版会、1984年4月、第45~71頁。
- 藍文欽著『鐵琴銅劍樓藏書研究』、漢美圖書出版公司、1991年7月。
- [日] 朝倉治彦大和博幸編『享保以後江戸出版書目』、臨川書店、平成五年12月。
- 徐複觀「韓偓詩與『香奩集』論考」、鄭健行吳淑鈿『香港中國古典文學研究論文選粹：詩詞曲篇』、江蘇古籍出版社、2002年、第59~91頁。
- 鄧小軍著『詩史釋證』、中華書局、2004年。
- 嚴紹璁編著『日藏漢籍善本書錄』、中華書局、2007年3月。

九種『香奩集』體例詩題對照表

	【玉山樵人集】本	【唐音統箋】本	汲古閣刻本	【全唐詩】本	【全五代詩】本
序	(翰林學士承旨行尚書戶部侍郎知制誥韓渥敘)	序(翰林學士承旨行尚書戶部侍郎知制誥韓渥序)	香奩集自序(玉山樵人韓致堯序)	無	序(翰林學士承旨行尚書戶部侍郎知制誥韓渥序)
目錄	無	無	香奩集目錄	無	無
	四言古：春暈	香奩集上四言古詩：春暈	詩：幽窗	幽窗	春暈
	五言古：五更	五言古詩：五更	〔江樓二首〕江樓	江樓二首	五更
	半夜	半夜	春暈日	春暈日	半夜
	七言古：南浦	七言古詩：南浦	咏燈	詠燈	南浦
	寄遠	寄遠五鼓日作	別緒	別緒	寄遠在岐日作
	惆悵	惆悵	見華	見花	惆悵
	意緒	意緒	馬上見	馬上見	意緒
	後魏時相州人作李波小妹歌疑其未備因補之	後魏時相州人作李波小妹歌疑其未備因補之	繞廊	繞廊	後魏時相州人作李波小妹歌疑其未備因補之
	長短句：三憶	長短句：三憶	展子	展子	三憶
	玉合	玉合	青春	青春	玉合
	金陵	金陵	聞雨	聞雨	金陵
	眠花落	眠花落	嬾起	嬾起	眠花落
	五言律：幽隱	五言律詩：幽隱	已涼	已涼	幽隱
	馬上見	馬上見	欲去	欲去	馬上見
	欲去	欲去	橫塘	橫塘	欲去
	信筆	信筆	五更	五更	信筆
	薦福寺講筵偶見又別	薦福寺講筵偶見又別	聯綴體	聯綴體	薦福寺講筵偶見又別

三卷本	【唐詩百名家全集】本	王恕春刊本	吳汝鐸注本	館・卷同校本
序	韓內翰香奩集序(玉山樵人韓致堯序)	自序(玉山樵人韓致堯序)	香奩集序(玉山樵人韓致堯序)	韓內翰香奩集序(玉山樵人韓致堯自序)
目錄	韓內翰香奩集目錄	香奩集目錄	無	無
卷一	幽窗	幽窗	幽窗	幽窗
1	〔江樓二首〕江樓	〔江樓二首〕江樓	江樓二首	江樓
2-3	春暈日	春暈日	春暈日	春暈日
4	咏燈	詠燈	詠燈	咏燈
5	別緒	別緒	別緒	別緒
6	見花	見花	見花	見花
7	馬上見	馬上見	馬上見	馬上見
8	遠廊	繞廊	繞廊	繞廊
9	展子	展子	展子	展子
10	青春	青春	青春	青春
11	聞雨	聞雨	聞雨	聞雨
12	嬾起	嬾起	嬾起	嬾起
13	已涼	已涼	已涼	已涼
14	欲去	欲去	欲去	欲去
15	橫塘	橫塘	橫塘	橫塘
16	五更	五更	五更	五更
17	聯綴體	聯綴體	聯綴體	聯綴體
18				

	側體	側體	[寒食夜]寒食 夜一作深夜一作 夜深	半睡	側體
	荷花	荷花	[六言三首]六 言	寒食夜一作深 夜一作夜深	荷花
	七言律：春盡日	七言律詩：春盡 日	[寒花]寒華	寒花	春盡日
	見花	見花	重遊曲江	重遊曲江	見花
	青春	青春	遙見	青春	遙見
	橫塘	橫塘	新秋	橫塘	新秋
	五更	五更	宮詞	五更	宮詞
	詠浴	詠浴	踏青	踏青一本有詞字	詠浴
	席上有贈	席上有贈	夜深	夜深一作寒食夜	席上有贈
	倚醉	倚醉	夏日	夏日	倚醉
	詠手	詠手	新上頭	新上頭	詠手
	擁鼻	擁鼻	中庭	中庭	擁鼻
	晝寢	晝寢	詠浴	晝寢	詠浴
	偶見背面是夕兼夢	偶見背面是夕兼 夢	席上有贈	席上有贈	偶見背面是夕兼 夢
	有憶	有憶	[早歸]早歸	早歸	有憶
	晝寢	晝寢	[玉合]玉合雜 言	玉合雜言	晝寢
	多情	多情	[金陵]金陵雜 言	金陵雜言	多情
	偶見	偶見	懶卸頭	懶卸頭一作生 查子	偶見
	閑情	閑情一作夜閒	倚醉	倚醉	閑情

19	半睡	半睡	半睡	半睡
20	[夜深]夜深一 作寒食夜	夜深	寒食夜一作深 夜一作夜深	寒食夜
21	寒花	寒花	寒花	寒花
22	重遊曲江	重遊曲江	重遊曲江	重遊曲江
23	遙見	遙見	遙見	遙見
24	新秋	新秋	新秋	新秋
25	宮詞	宮詞	宮詞	宮詞
26	踏青	踏青	踏青一本有詞 字	踏青
27	寒食夜	寒食夜	寒食夜一作夜 深	夜深
28	夏日	夏日	夏日	夏日
29	新上頭	新上頭	新上頭	新上頭
30	中庭	中庭	中庭	中庭
31	詠浴	詠浴	詠浴	詠浴
32	席上有贈	席上有贈	席上有贈	席上有贈
33	早歸	早歸	早歸	早歸
34	[玉合]玉合雜 言	[玉合]玉合雜 言	玉合雜言	玉合雜言
35	[金陵]金陵雜 言	[金陵]金陵雜 言	金陵雜言	金陵雜言
36	懶卸頭	懶卸頭	懶卸頭一作生 查子	懶卸頭
37	倚醉	倚醉	倚醉	倚醉

代所玉家為藩騎所虜 後寄故集賢裴公相國	代小玉家為藩騎 所虜後寄故集賢 裴公相國	詠手	詠手	代小玉家為藩騎 所虜後寄故集賢 裴公相國
寒食日重遊李氏園亭 有懷	寒食日重遊李氏 園亭有懷	荷花	荷花	寒食日重遊李氏 園亭有懷
六言律：六言三首	香齋集下 五言排律：懶起	懸髻	懸髻	懶起
五言排律：懶起	別緒	半夜	〔寄遠〕寄遠在 岐日作	別緒
別緒	春閨偶成十二韻	〔寄遠〕寄遠在 岐日作	蹤跡	春閨偶成十二韻
春閨偶成十二韻	無題三首并序	信筆	病一作懶憶	無題三首并序
無題三首	第四例押前韻	寄恨	妬嫉	第四例押前韻
第四例押前韻	七言排律：妬嫉	擲鼻	不見	妬嫉
七言排律：妬嫉	六言律：六言三 首	蹤跡	晝夜	六言三首
五言絕句：半睡	五言絕句：半睡	病憶	意緒	半睡
早啼	早歸	妬嫉	惆悵	早歸
雨處	雨處	晝夜	忍笑	雨處
春閨二首	春閨二首	意緒	詠柳	春閨二首
效崔國輔體四首	效崔國輔體四首	惆悵	密意	效崔國輔體四首
七言絕句：宮詞	七言絕句：宮詞	忍笑	偶見一作懶憶	宮詞
閑怨	閑怨	〔初赴期集〕初 赴期集一作初 期赴集	寒食夜有寄	閑怨
聯綴體	聯綴體	不見	效崔國輔一作 韓偓體四首	聯綴體
春恨	春恨	〔咏柳·其一〕咏 柳	後魏時相州人 作李波小妹一 作少婦張凝其 未備因補之	春恨

38	詠手	詠手	詠手	詠手
39	荷花	荷花	荷花	荷花
40	懸髻	懸髻	懸髻	懸髻
41	〔寄遠〕寄遠在 岐下日作	〔寄遠〕寄遠在 岐下日作	寄遠元注在岐 下日作	寄遠在岐下日作
卷二 42	蹤跡	蹤跡	蹤跡	蹤跡
43	病憶	病憶	病一作懶憶	病憶
44	妬嫉	妬嫉	妬嫉	妬嫉
45	不見	不見	不見	不見
46	晝夜	晝夜	晝夜	晝夜
47	意緒	意緒	意緒	意緒
48	惆悵	惆悵	惆悵	惆悵
49	忍笑	忍笑	忍笑	忍笑
50	初赴期集	初赴期集	初赴期集	初赴期集
51-52	詠柳二首	詠柳二首	詠柳二首	咏柳二首
53	密意	密意	密意	密意
54	偶見	偶見	偶見一作懶憶	偶見
55	寒食夜有寄	寒食夜有寄	寒食夜有寄	寒食夜有寄
56-59	〔效崔國輔體 四首〕效崔輔 國一作國輔體 四首	〔效崔國輔體 四首〕效崔輔 國一作國輔體 四首	效崔國輔一作 韓偓體四首	效崔國輔體四首



寒食夜	寒食夜	半睡	春晝一作晝	寒食夜
寒食夜有寄	寒食夜有寄	密意	三憶	寒食夜有寄
夏日	夏日	偶見	六言三首	夏日
新秋	新秋	寒食夜有寄	寒食日重遊李氏園一作林亭有懷	新秋
日高	日高	〔效崔國輔體四首〕效崔國輔體	思錄舊詩於卷上凄然有感因成一章	日高
夕陽	夕陽	後魏時相州人作李波小妹哥疑其未備因補之	春間二首	夕陽
夜深	夜深	〔春晝〕春晝四言	代小玉家為蕃騎所虜後寄故集賢裴公相國	夜深
聞雨	聞雨	三憶	舊福寺講筵開見又別一作別後	聞雨

60	〔補李波小妹歌〕後魏時相州人作李波小妹歌疑其未備因補之	〔補李波小妹歌〕後魏時相州人作李波小妹一作少妹歌疑其未備因補之	後魏時相州人作李波小妹歌疑其未備因補之
61	〔春晝〕春晝四言	〔春晝〕春晝四言	春晝一作四言晝一作晝
62-64	三憶	三憶	三憶
65-67	六言三首	六言三首	六言三首
68	〔寒食重遊有懷〕寒食日重遊李氏林亭有懷	〔寒食重遊有懷〕寒食日重遊李氏林亭有懷	寒食日重遊李氏園一作林亭有懷
69	〔錄舊詩有感〕思錄舊詩於卷上凄然有感因成一章	〔錄舊詩有感〕思錄舊詩於卷上凄然有感因成一章	思錄舊詩於卷上凄然有感因成一章
70-71	春間二首	春間二首	春間二首
72	〔代小玉寄裴公〕代小玉家為蕃騎所虜後寄故集賢裴公	〔代小玉寄裴公〕代小玉家為蕃騎所虜後寄故集賢裴公	代小玉家為蕃騎所虜後寄故集賢裴公

已涼	已涼	思歸寄詩于卷上凄然有感因成一章	復偶見三絕	天涼
已涼	已涼	〔春間〕春間	膩花落	已涼
深院	深院	代小玉家爲畜騎所騎後寄故集賀裴公相國	春闕一作和偶成十二韻	深院
中庭	中庭	蔚福寺講筵偶見又別	想得一作再寄春	中庭
遠廊	遠廊	〔後偶見三絕三首〕復偶見三絕	偶見背面是夕兼夢	遠廊
江樓	江樓二首	厭華落	五更	江樓二首
重遊曲江	重遊曲江	春闕偶成十二韻	有憶	重遊曲江
偶見	偶見	〔想得〕想得一作再寄春	半夜	偶見
復偶見三絕	復偶見三絕	偶見背面是夕兼夢	信筆	復偶見三絕
遙見	遙見	五更	寄恨	遙見
踏青	踏青	南浦	雨處	踏青
忍笑	忍笑	〔深院〕深院辛未年在南安縣作	擁鼻	忍笑
不見	不見	〔閨恨〕閨恨癸酉年在南安縣作	悶愁一作恨	不見
想得	想得	半睡	裏娜丁卯年作	想得

73	〔蔚福寺偶見有別〕蔚福寺講筵偶見有別	〔蔚福寺偶見有別〕蔚福寺講筵偶見有別	蔚福寺講筵偶見有別一作別後	蔚福寺講筵偶見有別
74-76	復偶見三絕	復偶見三絕	復偶見三絕	復偶見三絕
77	膩花落	膩花落	膩花落	膩花落
78	春闕偶成	春闕偶成	春闕一作和偶成十二韻	春闕偶成十二韻
79	〔偶見背面兼夢〕偶見背面是夕兼夢	〔偶見背面兼夢〕偶見背面是夕兼夢	偶見背面是夕兼夢	偶見背面是夕兼夢
80	五更	五更	五更	五更
81	有憶	有憶	有憶	有憶
82	〔半夜〕半夜三韻	〔半夜〕半夜三韻	半夜二韻	半夜
83	信筆	信筆	信筆	信筆
84	寄恨	寄恨	寄恨	寄恨
85	雨處	雨處	雨處	雨處
86	擁鼻	擁鼻	擁鼻	擁鼻
87	〔閨恨〕閨恨壬申年在南安縣作	〔閨恨〕閨恨壬申年在南安縣作	閨恨元注壬申年在南安縣作恨一作愁	閨恨壬申年在南安縣作
88	〔裏娜〕裏娜丁卯年作	〔裏娜〕裏娜丁卯年作	裏娜元注丁卯年作	裏娜丁卯年作

密意	密意	寒食重遊李氏園亭有懷	多情庚午年在樓林垺作	密意
寄恨	寄恨	兩處	偶見	寄恨
繫髻	繫髻	有憶	隨體	繫髻
新上頭	新上頭	〔閨恨〕閨恨壬申年在南安縣作	無題 <small>中序</small>	新上頭
半睡	半睡	〔裏卿〕裏卿丁卯年作	倒押前韻	半睡
蹤跡	蹤跡	〔多情〕多情庚午年在建林垺作	閨情一作夜間	蹤跡
思錄舊詩於卷上漫然有感因成一章	思錄舊詩於卷上漫然有感因成一章	偶見	自負	思錄舊詩於卷上漫然有感因成一章
病憶	病憶	隨體	天涼	病憶
詠柳	詠柳	〔荔枝三首〕荔枝三首福州作見翰林集	日高	詠柳
梨花	梨花	〔無題〕非序四首無題第一	夕陽	梨花
展子（計100首）	展子	第二	舊館	展子
	詠鏡（計101首）	第三	中存感贈	詠鏡（計101首）
		第四倒押前韻	春恨	
		詞：〔浣溪沙二首〕浣溪沙曲字集本坡	散體以下三百本	
		賦：黃蜀葵賦	長信宮二首	
		紅芭蕉賦（計101篇）	句（計106首）	

89	〔多情〕多情庚午年在建林垺作	〔多情〕多情庚午年在建林垺作	多情元注庚午年在建林垺作
90	偶見	偶見	偶見
91	隨體	隨體	隨體
92-94	〔荔枝三首〕荔枝三首福州作	〔荔枝三首〕荔枝三首福州作	荔枝三首福州作
95	無題第一	無題第一	無題第一
96	第二	第二	第二
97	第三	第三	第三
98	〔第四倒押前韻〕第四倒押前韻	第四倒押前韻	第四倒押前韻
99-100	曲子浣溪沙二首	曲子浣溪沙二首	曲子浣溪沙一首
卷三101	黃蜀葵賦	黃蜀葵賦	黃蜀葵賦
102	紅芭蕉賦	紅芭蕉賦	紅芭蕉賦
103	南浦	南浦	南浦
104	深院	深院	深院
105	閨情	閨情	閨情一作夜間
106	想得	想得	想得一作再寄春
107	自負	自負	自負

